〔古事記中仲哀〕故建内宿禰命、率其太子、○神應爲將禊、而經歷淡海及若狹國之時、於高志前之角鹿、造假宮而坐、爾坐其地、伊奢沙和氣大神之命、見於夜夢云、以吾名欲易御子之御名、爾言禱白之、恐隨命易奉、亦其神詔、明日之旦、應幸於濱、獻易名之幣、故其旦幸行于濱之時、毀鼻入鹿魚、既依一浦、於是御子、令白于神云、於我給御食之魚、故亦稱其御名、號御食津大神、故於今謂氣比大神也、

〔續世繼四宇治の河瀨〕ためあきら○高階爲章といひし人も、本はためのりといひけるを、白河院のためあきらとめしたりけるより、かはりたるとかや、おほちの高大貳は、なりのりといひしかども、このころ、そのすゑは、むねあきらなどいへるは、めしけるより、あらたまりたるとかや、

〔松の落葉四〕男女の名昔やうにつくはひがことなる事

近き世に、ふることまなびをし、いにしへぶりの歌よむをのこは、なに彦、くれ麻呂といふやうなる、いにしへざまの名をつくなるは、いと〳〵心づきなく、さはすまじきことになん、名はまぎれぬためのゑるしなるに、なに彦、くれ麻呂といへば、いにしへの人ときこえて、さにあらず、いとまぎらはしき事ならずや、ゑかつきてのち、名のをかしからずとて、たび〳〵かふるは、ことにわろし、その人は、これかかれかとまがふべし、

〔年々隨筆一〕いにしへの人は、某麻呂といふ名多し、自稱してまろといふも、まろはもとより自稱なるにつきて、人の名にもおほくつくか、人の名に多かるゆゑ、自稱ともなれるか、もとすゑは、ゑらねど、ひとつ根ざしの詞にはあるべし、近ごろまでは、天子の自稱のやうに心えをりつるを、學問の道あきらかになりて、今はさしもあらぬにや、牛飼は、後々までも、丸といふ名つくうへに、天平勝寶の東大寺の奴婢籍にも、某丸といふ名多かり、

〔安齋隨筆前編一〕一人名唱以字音　世に名高き人の名をば、字音をもつて唱ふ、たとへば道風をば、タウフウ、俊成をば、シユンゼイ、定家をば、テイカ、家隆をば、カリウと唱る類也といふ說あり、按